

近藤貴弥

水仙の花束

稗田阿求の書齋が、そっくりそのまま永遠亭の一室に移され、いよいよ冬を迎えただろうか。永遠亭で用意された阿求の書齋は、元の書齋よりも広く、山のように置いていた資料や草稿を置いてはまだ十二分な広さを保っており、布団や寝具を置く余裕すらあった。書齋と寝間が兼用されることとなった。

阿求が自由に動けるのは、この広い部屋だけ。しかし、阿求にはあまりにも狭い。

布団から出た阿求は文机の奥まで歩み、部屋の外へ音が漏れないようにそつと窓を開ける。竹が視界一面に広がり、緑に染まる。竹は真つ直ぐ天まで伸び、天高いところで微かに重なり合っているのか地に影を落とし、陽の光をまばらに注ぐばかり。

永遠亭の周りには人里のように商家は建っておらず、通りからの呼び声は聞こえず、ただ竹の葉が風に揺れる音が聞こえるだけだった。

窓の反対に位置する襖の向こうでは、室内の物音に気づいたのか、ウサギの足音が一つ、二つ。室内の阿求を気遣うように。

布団に戻ろうと阿求が振り向いたのと、引き戸が開いたのはほとんど同時だった。ウサギ

が入ってくるのと思っていたのだが、その頭に長い耳は見えず、白髪に赤いリボン。見覚えのある顔が、阿求の調子を尋ねる。

「調子はどうかしら？」

意外な来訪に驚く阿求に対して、客人である藤原妹紅は落ち着いた声音だった。阿求は落ち着きを取り戻し、布団に戻ることになく、背中に柔らかく冷たい風を受けて答える。

「今日は妹紅さんなんですね」

「ウサギは皆、忙しいみたい。意外かしら？」

「意外、ですか？」

「私がこうして来るってことがよ」

「今日が初めてではないのに、意外も何もありませんよ」

「それもそうね。それで、調子はどうかしら？」

「普段と変わらず良い調子です」

阿求はいつもと返事を、妹紅に返した。毎朝様子を見に来るにウサギに混じって、妹紅も

阿求の元を訪れ、調子を確認する。ウサギ達の事務的な確認とは異なり、本題に入るまでの枕詞のようなものだった。

妹紅は文机の近くに腰を据える。阿求はいつもそうしているように文机の前に腰を下ろし、紙と筆を用意する。

妹紅の白い指先から、微かに土の匂いがした。竹林に足を運んだり、警備に勤しんでいたのだろうか。妹紅がここに足を運んだ時に話すことは決まって、外のことだった。迷いの竹林を超えた広い世界のことを、語ってくれる。阿求がここを出られない代わりにのように。

元の屋敷にいた頃よりも快適なような気がするが、自由に外に出られないのは困る。阿求は多くの時間を書齋で過ごしていたような人間ではなく、必要であれば幻想郷の至るところへ足を運び取材を行っていた。幻想郷の全てを記録するという役目が、阿求にはあるのだ。

その役目は今では八雲紫達が代筆という形で引き継いでいるらしい。妖怪が妖怪の記録を残しているような気はしないが、そういうことを引き受けるのは彼女達しかいなかった。

この部屋を出て、永遠亭を抜け出し竹林を超えた外からの情報は、今ではもう妹紅ぐらい

しか話してくれない。阿求はこうなってしまった自分を慰めるように妹紅の話に耳を傾け、妹紅の暮らしを記録する。

永遠亭の一室に閉じ込められたのは、阿求の体調が良くないためなのであるが、阿求としてはもう随分と調子が良いような気がしてならない。しかし、阿求の心身を管理する八意永琳や鈴仙・優曇華院・イナバは、首を縦に振らない。

どこがどう悪いのか尋ねると、どうやら頭の中が良くない状態らしい。

忘れるということができない阿求の頭は絶えず情報を集め、集めるがあまり重石となり、睡眠による記憶の整理も上手くできていないらしく、阿求の頭に異常をもたらしていると説明を受けた。

阿求としては全然そんなことはないのだが、永琳から何か記憶に不具合が生じていないかと問われると、いくつか思い浮かぶ。

不意に、記憶が重なり合う。人里を歩いている時、博麗神社へと続く長い階段を登っている時、妖怪と話している時、阿求の記憶は過去のいつかの記憶に繋がりがり、不可思議な場を作

り、現実だと認識させようとする。阿求自身の記憶でもあれば、阿求の記憶ではない大部分が忘れられたはずの御阿礼の子の記憶と混ざり合う。

昔の記憶と混ざり合った場合は、そのまま記憶され、時としては記録され、未来の阿求はその間違いを正すこともあれば正せないこともある。

永琳が言うには、現在という時間の認識が曖昧になっているとのこと。阿求自身はそう思わないのだが、食事の時にその曖昧な状態が顕著に訪れる。

屋敷で用意された食事や永遠亭で用意される食事が、記憶にある食事と重なり合い、目の前の食事がいつの食事なのか分からなくなる。

そういう日が多くなり、人里で良からぬ噂が立てられる前に、阿求の身は永遠亭へと移された。人里で流れた噂は精々、阿求の体調が良くなり、最近の阿求の様子は……という程度で、誰も阿求にかかるようになった。そう言われると、最近の阿求の様子は……という程度で、誰も阿求の頭の中まで覗き込むようなことはなかった。

いつ治るのか、いつ屋敷に戻ってくるのかと心配を口にするのは人里の人間程度で、優曇

華も永琳もそして阿求自身も、そのことは口にしなかった。勿論、妹紅も。

一度でも異常が見つかった頭の中は快復に向かうことはなく、緩やかに劣化していき、やがて死へと至る。そういうことを、全員が知っていたため、阿求が訊くことはなかったし、永琳は人里に戻れた際のことを話すこともなかった。ただ、劣化していく速さをいかに緩やかにしていくのか、ということばかり話した。

阿求の今後は、この小さな部屋の中で過ごすしかない。時が停まったような部屋の中で。窓の外はいつまでも竹が見え、時折運ばれる風だけが辛うじて、時の流れを教えてくれるかもしれない。しかしその風も、壁のように並ぶ竹により、阿求の部屋まで届くことは稀だった。そういう静止した時の中で、妹紅だけが外のことを話す存在として、阿求の前に姿を見せた。一方で、姿形の変わらない妹紅の姿は、阿求の感覚を錯覚させることもある。今、阿求の前に姿を見せている妹紅が、遠い昔に見聞きした妹紅のような気がする。あるいは、遠い過去にいた妹紅が突然姿を見せたような気がする。そんなふうに阿求の頭の中でだけ、全く違う妹紅の姿を組み立てしまう。

その妹紅が現実の妹紅であるかどうかは、阿求にしか分からない。阿求は粗相のないように沈黙を貫き、苦々しい沈黙が妹紅にも伝わったのか彼女も話し終えると沈黙に徹することが多い。

外を吹く風の音だけが、部屋へと流れ込んできた。

沈黙を迎えると阿求は決まって、人里のどこかで飼われる鳥のことを思い出していた。小さな鳥籠の中で飼われる鳥のことを……。

妹紅はどうして、外のことを話してくれるのだろうか。妹紅は知っているのだ。阿求がここから出られないということ。妹紅の話を聞く度に、阿求の胸の内にはある衝動が生まれる。ここを出て、記録したい。しかし、誰もそれを許すことはない。混ざり合った記憶は、阿求の足を彷徨わせ、時間の感覚を奪い、この書斎兼寝室へと帰さなくなる。

阿求の口の端から、嫉妬のような火が零れた。

「私は、もうここを出られませんよ」

妹紅は阿求の口から零れた火に気づいても、軽い調子だった。



「でもだからといって、諦める必要はないんじゃないの？」

「……そういうものですかね？」

「そういうものよ。明日には、この部屋の外、明後日には永遠亭の外……そういうふうになっているのよ」

いつまでも軽い調子の妹紅に腹立たしいものを覚えて、阿求はつい訊いてしまった。窓の向こうから忍び込んでくる風と同じように温度の低い声が、阿求の口から流れた。

「過去の私も、そうでしたか？」

妹紅は一瞬、目を見開いて、口を閉ざした。それから、

「こうなるのは、あなたが最初よ」

と顔を伏せて呟いた。

阿求はその答えに、二つの疑問を懐いた。

こうなるというのは阿求の頭の中のことを意味しているのだろうか。あるいは、こうして永遠亭で看取られるのは阿求が初めてということなのだろうか。

後者であることは、阿求の内に潜んでいる幾人もの記憶が証明しようとしていた。阿求がこれからどうい道歩むのか、妹紅は知っているのだろうか。

「私はこれからどうなると思いますか？」

試しにそう訊くと、妹紅は涼しい顔で答えてくれる。

「そう悲観することないわよ。別に高熱に苦しんだり、食事が摂れなくなったりするわけじゃないんだから」

「そう分かりやすい病人になった方が幸せかもしれませんね」

「それはそれで苦しいわよ」

「他の方から見て普通の人と変わらない方が辛くありませんか？」

「そう？」

「……ええ、違います。妹紅さんが二重に見えたり見えなかったりします」

「二重に？ 目が悪くなっているってことかしら？」

「そういうわけじゃないんですがね……。頭の部分のような気がします」

阿求の記憶にいる妹紅と今ここにいる妹紅が重なり合っているのならば、妹紅がここに来ることが少なくなれば妹紅が二重に見えるようなこともなく、阿求の頭の中は落ち着くであろう。そういうことは、妹紅もそして阿求自身も気づいている。そうした方が、阿求の生きられる時間は一秒でも一分でも一日でも伸びるような気がする。

「だったら私が来ない方が良くかもしれないわね」

試すように薄く笑う妹紅の言葉は本音なのかもしれない。阿求はすぐに笑って拒んだ。

「それはそれで困ります。知ってますか妹紅さん、この生活、暇で暇で仕方ないんですよ？ 喋り相手の一人ぐらいいてもいいと思いませんか？」

妹紅は安心したかのように笑った。

もし妹紅がここを訪れなければ暇が全身を蝕み、ここにいないだろう。重なり合う妹紅を認識しながらも話し相手の一人や二人はいてほしい。

生きられる時間が長い方が良くのかもしれない。しかし、現在の時間の認識が曖昧になっている阿求が、生きられる時間を認識できるかどうか分からない。

妹紅の話が終わり、彼女は去った。

時は流れ、風が窓を揺らすこともあった。竹が揺れ、葉がさざめく。外の風はまだ、あの時のように冷たい。

短くなった陽の光は、阿求の所まで届くことはない。

分厚い羽織を着込んでも、隙間に風が染み渡る。

阿求の頭はまだ全然、時の流れを認識できていた。妹紅が訪れても、過去に全てを塗りつぶされることもない。ただ、現在が曖昧になる頻度は増えた。

生きているのだが、ただ生きているだけののような気がして、意識が残っている間に自身の生の全てを終わらせようと考ええる。頭の片隅にそんな考えがよぎることもある。

が、今の阿求の身の回りを支える誰もが、阿求を生かそうと手を尽くしてくれる。その善意が、阿求を苦しめる。

妹紅は、どうなのだろうか。妹紅は阿求を生かすために訪れているような気はしない。本当に生かす気ならば、妹紅はここに来ないだろう。妹紅の存在が、阿求の記憶を掻き乱し、

現実を曖昧に溶かすのだから。

妹紅は御阿礼の子の一生を見届けている一人であり、阿求の頭の片隅によぎる考えを相談されたことは、一度や二度ではないだろう。

妹紅が阿求の元に訪れた時、こういう願いを口にした。

「妹紅さん、買ってきてほしいものがあるんですが」

「何かしら？」

「睡眠薬を何錠か」

阿求の買い求めるものに、妹紅は当然といった調子で尋ね返す。

「永琳に頼めば、そこらへんは見繕ってくれるんじゃないの？」

「あの人じゃ、駄目なんです」

「……駄目？」

「もう起きることがない薬が欲しいんです」

「死にたいってこと？」

妹紅の確かめるような問いかけに、阿求は静かに、意を決して答えた。

「そうです」

妹紅は焦ることも慌てることもなく、そう、と呟いた。高い天井を仰いで、もう一度、そう、と呟いた。

阿求は妹紅の生の香りが漂う横顔を見上げて、彼女の背中を押すように言う。

「今も別の誰かが記録を続けていると聞きます。だから、それでいいんです。もう、それでいいんです」

妹紅は何も言わなかった。短い沈黙の後、妹紅は何かに縋るように問う。

「他じゃ、いけないからしら？」

妹紅の言葉は少なからず阿求に疑問を懐かせた。

「他……？」

「そういう……毒を呑む以外にも選択はあると思うのよ」

「縊死とかそういうことですか？」

「そうね。いけないかしら？」

阿求は室内を見渡したが、どこにも阿求を死にたらしめるものはなかった。あの梁には阿求の体重を支えるほどの強度はないように見える。妹紅に外から調達してもらうしか方法はない。

「何か良い方法があるんですか？」

「私だったら、上手く燃やせられるわ」

焼死が苦しいということを目にしたことがある。阿求はなるべく苦痛が伴わないものを選びたかった。

「……苦しくありませんか？」

「長生きしたお陰かしらね、加減が分かるようになっちゃったわ」

自嘲気味に言う妹紅に釣られるように、阿求も微笑を返した。

「妹紅さんは、苦しくありませんか？」

妹紅は驚いたように笑って、大きな声を上げた。

「そう訊くのは卑怯じゃない？」

「聞けなくなると思えますから」

「……準備とかあるから、少し待ってもらっていいかしら？」

「どれくらいでしょうか？」

妹紅は視線を窓の向こうへと投げた。竹林しか見えない窓の向こうへと。

「……何か外から持ってくるわ。その時に、全てを終わらせましょう」

そう言つて、妹紅は阿求の部屋から出て行つた。

阿求の部屋はいつまでも静かで、妹紅が訪れない。

阿求は妹紅と交わした約束を守るかのように、生き続けた。妹紅との約束は、阿求の頬に血の気を巡らせ、妹紅の横顔に感じた生の香りを自身の内に感じさせるものだった。皮肉のようだ、と阿求は自嘲を漏らすこともあった。

そんなある日、永遠亭に妹紅の足音が響き渡つた。静かだった歩みは途中で小走りになり、阿求の部屋の前で止まり、襖が開いた頃には全然落ち着いていた。



阿求の部屋へとやってきた妹紅は、黄色い水仙の花束を抱えていた。上品な香りが、阿求の部屋を満たした。

阿求は朗らかに笑って、妹紅を迎えた。

「春ですね」

妹紅の顔は朗らかに笑う阿求と違い、強張り、緊張を帯びていた。それでも、声は阿求を氣遣うように柔らかい。

「お待たせしちやっただかしら？」

「待ちました。でもいいんです。良いお花を、ありがとうございます」

阿求は妹紅から水仙の花束を受け取って、上品な香りに包まれ、恍惚そうに目を閉じた。

（了）